

アイヌ英雄叙事詩における来歴話

— 鍋沢元蔵氏のテキストから —

遠藤 志保

1. はじめに

アイヌ英雄叙事詩は、主人公の少年（時に少女の）英雄が敵の勇士との戦いを次々とくりひろげていく物語である。その戦闘場面では、アイヌ英雄叙事詩に共通のモチーフや常套表現を駆使して語られている。

一方で、そのような常套表現が使われないで語られる箇所も少なくない。たとえば、各英雄叙事詩でそれぞれ固有の筋を有していることから、プロットに関する語りの部分は、それに該当するだろうと考えられる。そのひとつが、どういう経緯で戦いに至ったのかなどについての説明である。

本論文では、鍋沢元蔵氏の筆録した英雄叙事詩を対象とし、物語中で経緯を語るような表現に焦点をあて、その内容や使用される場面などを分析していきたい。

2. 使用テキスト

本論文では、鍋沢元蔵氏の筆録による英雄叙事詩を分析対象としている。鍋沢元蔵（アイヌ名・モトアンレク）氏は、明治十九年（一八八六）生まれで、昭和四十二年（一九六七）に没している。沙流方言の話者であり、英雄叙事詩をはじめ、神謡・祈詞などのテキストを筆録によって残している。本論文では、公刊されている『アイヌの叙事詩』、『アイヌ叙事詩 クトネシリカ』に収録されている英雄叙事詩を扱う。具体的には、「ニタイバカイエ」、「鶯鏝」、「喰べ気違い」、「魔竜退治」、「余市姫」、「ト리카プト姫」、「水なしに育つ、火なしに育つ」、「犬育て、悪者育て」、「クトゥネシリカ」⁽²⁾と題された、計九編である。

3. 来歴話について

本論文で取り上げるのは、ジュネットのいう「後説法」のように「物語内容の現時点に対して先行する出来事をあとになつてから喚起する語りの操作」〔ジュネット 一九八五 三五〕である。ただし、「後説法」という用語では、本論で述べるように、後説法による語りの箇所そのものを指す際に語弊がある可能性もあるため、以下では単に「来歴話」と呼ぶことにする。

ここでは、アイヌ英雄叙事詩における来歴話を、その機能から大きく二種類に分けて考えることとする。

ひとつめは、本編中で初出となる事柄が語られる場合である。アイヌ英雄叙事詩は、少年英雄たる主人公の視点による叙述で語られる。主人公が見聞きし、行動することを、主人公目線で「わたしは〜した」と語っていく。そのため、物語において初出となる過去の出来事というのは、子どもである主人公が知らない事柄、未経験の事柄についての説明となることが多い。たとえば、一世代前の出来事や、主人公がいない間に別の場所で起こった出来事を語ったものである。主な内容としては、それぞれの戦いの原因、登場人物たちによる行動の真意などが多く、種明かしのような役割を担うことしばしばである。以下では、こうした初出の事柄を語る来歴話を「補完的来歴話」と記す。

もうひとつは、既出の出来事についての言説である。物語中

で既に明らかになつている事実や、物語中で主人公が体験した出来事をくり返して語る。したがって、新しい内容を付け加えることはなく、ごく短く簡略化された表現になることも少なくない。むしろ重要なのは、プロットにおいて大切な事柄や長い戦いの結果等をまとめることで、それによつて、そこまでの話の流れを簡単に振り返り、聞き手の記憶を手助けする装置としての役割である。以下では、このような既出の事柄を語る来歴話を「反復的来歴話」と記す。

4. 来歴話の表現

(1) 来歴話における常套表現

来歴話の内容を見ていく前に、その表現について概観しておきたい。

まず、来歴話においてのみ使われるような常套表現は、ほとんど見られないといつてよい。その理由としては、前述のとおり、来歴話そのものが全英雄叙事詩で同じように語られないことがあげられる。それぞれの英雄叙事詩で、来歴話を語る人物、語られる状況や内容は必ずしも一致しない。そのため、同一の描写や表現を複数の英雄叙事詩で使いまわすということがほとんど見られず、常套的な表現を使用する余地がきわめて少ないのである。

いくらか常套的な表現に近いものが見られるとすれば、来歴話の前後に見られる語句であろう。これらは、どこから来歴話

が始まっているのか、あるいはどこで終わっているのかをできるだけ明確に示す工夫のために挿入されている。

たとえば、主人公による回想の前後には、ヤイコトウイマ／コシラムスイエ⁽³⁾「考える、思いをめぐらせる」という韻文的な表現の動詞が多く見られる。この語句は、鍋沢元藏氏の英雄叙事詩においては、回想の前後のみで見受けられ、この場面に特有の表現となっている。特に回想が数十行以上の長きに及ぶ際に用いられるのも特徴である。ごく短い回想場面、あるいは過去の事実を確認するだけのような場合には、その内容の直前か直後に、ヤイヌアンフミ「わたしが思うことは」などのような、前述の動詞よりは日常的な表現になることが多い。

また、来歴話は登場人物による発話の形式で語られることも多い。その際にはどこからが発言なのかを明示するようなパターンや表現が見られる。こうした指標となる表現のなかには常套的な表現も見られるが、それは来歴話に特有なものではなく、その他の発話とも共通する表現となっている。

敵や味方の勇士たちによる発話では、先に自分が何者であるかを語ってから来歴話に入るといったパターンが確立している。たとえば、主人公と敵対していた彼の実弟が、何故実の兄を殺そうとしていたのかという理由を語る場面では、「シヌタブカ彦（＝主人公の父親）が／天国に／男子を一人／女子を一人／子供を持っていた／その男子が／われである」と、自分が主人公の弟であり、神が住む天の国で父親と妹と共に暮らしていたとい

う素性を明らかにする。その次に、「わが父親の／申した言葉は／『神の国に／われ評判の無い／その時に』」と、自分以上に高い主人公に対して父親が嫉妬したのだと続けて、主人公を目的にした理由を述べている「喰べ気違ひ」二七八〜二八九行⁽⁴⁾。さらに、場合によっては、名乗りに続けて「父（兄）から聞いた話だが」などのように、誰から聞いた話なのかを付け加えることもある。

以上のように、名乗りを上げて話を聞いた人物に触れてから来歴話を語り始めるといったパターンは、発話による来歴話においては、ほぼすべての場合に共通している。これは、どこからが来歴話であるのかをより明確にする助けとなると考えられる。

一方、来歴話の始まりを明示するような常套表現としては、「（わたしが）言ったら（＝これから言うので）／良く聞いて／下さい」「ニタイパカイエ」七一〜七三行など」のような、主人公に対してよく聞くようにと注意を喚起する表現が発話の冒頭に入ることが多い。だが、このような発話の開始を明示する語句は、来歴話以外の発話においても多く見られる。したがって、来歴話の開始を示す語句というより、発話の開始を示す際の常套表現であると考えたほうがいいだろう。たとえば、「水なしに育つ、火なしに育つ」では、主人公に対して、わたしがこれからあなたの鎧を取って来ましよう、と今後の行動予定を語る女性、その発話の初めに「わたしの言うこと／よくお聞き下さい！」

(六三六―六三七行)と述べている。

(2) 反復的来歴話の表現

反復的来歴話においては、必ずしも一から十まで初出のときと同じようにくり返すわけではない。逐一回想する場合もあるが、むしろ簡潔に反復する場合のほうが多い。たとえば、数十行にわたって敵の村を滅ぼす様子を語った場合でも、それを反復する際には、敵が「わが部下は／皆殺しにされた」「喰べ気違い」「二九二―二九三行」と語るように、短く簡潔にまとめて語るだけの場合もある。その他、「このように／した」のように指示語を用いることで簡潔にくり返す場合もある。以下では後者について簡単に取り上げたい。

指示語を用いて既出の事柄を語る場合、よく用いられるのはタブネ「このように」という副詞を用いた表現である。鍋沢元蔵氏の英雄叙事詩においては「タブネカネ」ならびに「タブネタブネ」という語句が用いられ、「このようにして」や「かよう、しかじかである」のように訳されている。しかし、ともにその用例は少なく、筆者が見た限りではタブネカネとタブネタブネをあわせ、見受けられたのは全部で四例であった。

次にあげる例は、主人公が敵のレブンシリ彦（レブンシルンクル）を倒した後の表現である。戦いが終わったところで、「空が晴れた」という戦いの終結を示す表現が入り、その後で次のように語られている。

タブネカネ このようにして

レブンシルンクル （敵の）レブンシリ彦を

アクトウラノ （彼の）弟とともに

アライケヒネ われ（＝主人公）殺し

アマサマムニ 地べたの倒れ木

サマムニクルカ 倒れ木の上に

アオソロウシ 腰かけた（＝休憩した）。

「水なしに育つ、火なしに育つ」一一〇四―一一〇行

ここでのタブネカネ「このようにして」は、この少し前で行われたレブンシリ彦との戦いを指している。そして、「このようにして殺した」という表現でもって、長々と語られた戦闘場面を簡単に反復している。このように、直前でこそなくとも、少し前で行われた場面を指すという用法は、他のすべてのタブネカネ「このようにして」でも同じである。

また、用例が少ないために詳細は今後に譲ることになるが、タブネカネという表現は、叙述者が変わるなどの場面の転換で用いられていることが多いようである。ここにあげた用例でも、戦闘から休憩への狭間にあたる箇所が使われており、こうした新たな場面への橋渡しとなる箇所でも用いられることも、タブネカネの使用における特質のひとつではないかと考えられる。

5. 来歴話の内容と語られる場面

(1) 補完的来歴話の内容

補完的来歴話で語られる内容は多様であるが、大きくいくつかの種類に分けることができる。

ひとつには、「新しい登場人物に関する説明」がある。これは主に戦いの前に語られる。アイヌ英雄叙事詩では、物語の途中で次々に登場人物が増えていくことが普通である。そして、彼らの多くは、いざこれから戦いが始まるというときに、自分の村から飛んでやって来て参戦するという登場の仕方をする。その際に、自分がどこの誰であるのかと共に、なぜ参戦するのかという理由を語るのである。

あるいは、「主人公が見ていない（知らない）間に起きた出来事の説明」もある。前述のとおり主人公は、過去にあった出来事に関しては、ほとんど知らない。そのような事柄や、主人公が別の場所にいた間に起きた出来事などについての説明である。たとえば、主人公の加勢のためにやってきた女が、『女の戦争を／くぐりぬけて来た』、『鶯籠』五五六～五五七行」と、主人公と行動を共にしていなかった間に女勇士同士で戦っていたことを述べるのも、この類である。

また、戦いを中心として展開していくアイヌ英雄叙事詩では、『金のラッコの為に／戦がはじまる』、『クトウネシリカ』八〇二

（八〇三行）のように、「戦いの理由」もまた、多く語られる。

さらには、物語中での意図不明な言動、たとえば主人公が満足な食事を与えられないようなひどい育てられ方をしたことについて、「親戚のない／部下のない／われ（＝主人公の父）であったゆえ／そのために／カラフトびとに／だまされて」、『犬育て、悪者育て』一〇九〇～一〇九五行」と、理由が説明されるように、「言動の種明かし」がなされることもある。

もつとも、一度の来歴話で複数の内容が語られることもあり、必ずしも峻別はできない。例として、「ニタイバカイエ」という英雄叙事詩から、敵対者であるトゥムンチ・エカシ（原著訳は「魔の爺神」）が語る来歴話をあげる。この物語で主人公は、実の親兄弟とはなく、この魔の爺神のもとで育てられていた。その理由を主人公の養育者である魔の爺神がみずから語っている部分である。

『あまりにも／シヌタブカ彦（＝主人公の父親）は／神の国までも／評判立って／われ（＝トゥムンチ・エカシ＝魔の爺神）妬ましく思ったゆえ／様子を探るに（シヌタブカ彦の住居に）／行ってみると／幼児たち（＝シヌタブカ彦の息子たち）／ばかり／寝ていた、／（その子どもが）あんまり／美貌で／あったので／少々大きいものは／物事を覚えて／いると思つて／それで／一番小さいもの（＝主人公）を／われ取つて／育てたこと／本当／なのである』

『ニタイバカイエ』一〇二〇～一〇四一行

ここでは、主人公が知らなかった彼自身の生い立ちの秘密が語られる。それは、魔の爺神が主人公をさらったことに端を発するということであった。すなわち「主人公が見ていない（知らない）間に起きていた出来事の説明」であると同時に、魔の爺神の行動によって主人公兄弟と魔の爺神との間に戦う因縁が発生したことから、「戦いの理由」の説明にもなっている。

(2) 補完的来歴話の場面

補完的来歴話は、物語中のどこでも任意に語られるわけではなく、語られることが多い場面が決まっている。そのひとつは「冒頭」、もうひとつは「戦いの前」である。

ここでは「冒頭」を、それぞれの物語の展開において最初の戦いが始まる前までの部分を指すこととする。アイヌ英雄叙事詩の冒頭というと、主人公が養い兄・養い姉などによって壮麗な山城で育てられている描写が語られている最初の数行のことになるが、ここではそれよりも少し広く長い範囲を指す。また、アイヌ英雄叙事詩では、物語の途中から新たな展開が始まることもある。そのように途中から始まった新しいプロットにおいても、同様に「冒頭」を設定したい。たとえば「水なしに育つ、火なしに育つ」では、前半と後半とで叙述者（＝主人公）が変更している。主人公が入れ替わった箇所からは、前半とはまったく異なる別の物語が展開していく。そして、後半の「冒頭」では、ランペシ村の女が、自分の村で起きた出来事と、そこから自分が逃げ出して

来た理由を主人公に語るという形で来歴話が披露され、その話に出てきた「魔の鷲」がその後の主人公の敵となる。

この例のように「冒頭」では、主人公が戦いに関与していく理由などについての説明がなされるのが普通である。これは、それぞれの話の発端となり、主人公が戦いを始めるきっかけにもなる。今回分析した九話のうち七話で、冒頭において何らかの補完的来歴話が語られていることから、冒頭における来歴話は標準的であると言える。

語られる内容は、各話によって異なっている。だが、完全に個々別々の内容しかないというわけでもなく、例えば「冒頭で戦いが終了している（死に掛けている）ので、そこに至るまでの説明がされる」などのように複数の英雄叙事詩で見られるような内容も皆無ではない。

冒頭以外では、それぞれの戦いが始まる前にも来歴話は語られている。ここでは、主人公に加勢（あるいは敵対）するために、新たにやって来た人物が「自分がどこから来たか」という素性の人間で、どんな因縁があるために主人公に味方（あるいは敵対）するのか」といったことや、「自分がここに来る前には、どういう行動を取ってきたのか」が語られるのが普通である。

たとえば、「鷲鎧」では、アトイヤ村から来たという娘が、人間世界でもっとも素晴らしいのは主人公であるという噂を聞いたが、それを妬ましく思い、わたしは主人公と戦うために武器を用意したのだ（一〇九三〜一一三〇行）と、この時点よりも

過去の行動や主人公に敵対する理由を語っている。そして直接には、主人公との戦いに移行していく。

これは必ずしも戦いの直前に挿入されるわけではない。こうした来歴話と戦いとの間に、他の事柄が挟まれることも珍しくない。だが、ほぼすべての戦いの前で、各々の戦いに対応する補完的来歴話、すなわち戦う理由や主人公に敵対する理由などが述べられている。

また、ある原因から始まった戦いが、敵を変更しつつの連続となることもしばしばある。その場合にも、相手が変わるたびに反復的来歴話として、同じ原因を簡潔にくり返している。したがって、戦いに際しては、その理由をなぞってから戦いに移行するという形式が定型となつていると言えるだろう。

(3) 挿入エピソードと補完的来歴話との関連

鍋沢元蔵氏の英雄叙事詩のうち、「クトゥネシリカ（虎杖丸）」というテキストに関して、彼自身が「早くから、ヤヤシノアシとワカルバの兩人より伝承されたと語っている」「門別町郷土史研究会 一九六五 四」という。このように鍋沢元蔵氏の師匠筋にあたとされている鍋沢ワカルバ氏だが、彼が口述した「クトゥネシリカ」は、金田一京助によって採録・公刊されている。

そこで、鍋沢元蔵氏による「クトゥネシリカ」（以下、「テキストA」と記す）と、このテキストに直接影響を及ぼしたであろう鍋沢ワカルバ氏の口述による「クトゥネシリカ」（以下、「テ

キストB」と記す）とを比べてみると、テキストBには見られないエピソードが、テキストAのほうには挿入されている。

表1 「クトゥネシリカ」における2種の戦いの流れ

| 戦い | テキストA | テキストB |
|------|--------------------------|--------------------------|
| 1 段目 | 金のラッコをめぐる戦い 「クトゥネシリカ」 | 金のラッコをめぐる戦い 「クトゥネシリカ」 |
| 2 段目 | カネベトウシクルらとの戦い | カネベトウシクルらとの戦い |
| 3 段目 | ボンモシルンクルとの戦い | — |
| 4 段目 | 虚病姫をめぐる戦い フレマウポとの戦い | 虚病姫をめぐる戦い フレマウポとの戦い |
| 5 段目 | （以下、続く……） | （以下、続く……） |

表一は、テキストA・Bにおける冒頭からの戦いを順に並べたものである。⁽⁵⁾ここからも明らかのように、三段目（原著ではIV章前半）にあたる「ボンモシルンクルとの戦い」は、テキストAでのみ語られている。

この戦いは、ボンモシルンクルが主人公の味方であるイヨチウンマツという女をさらうことが戦いのきっかけとなっている。実は、テキストA・Bで共に見られる五段目の「フレマウポとの戦い」も同じく、女さらいが戦いのきっかけとなるエピソードである。そこでは、虚病姫（ニサツタム）をフレマウポ（ニチワシペトウシクル）がさらっている。また、単にモチーフが一致するだけではなく、登場人物も一部重複している。テキストBの「フレマウポとの戦い」では「メイイ小袖の／六人の童子

／六人の童女／ケチャウ小袖の／六人の童子／六人の童女」〔金田一 一九三一 三七五八―三七六三行〕が登場し、主人公の邪魔をする。彼らはテキストBの他の場面では、まったく現れず、この場面にだけ現れる。一方で、テキストAの「ボンモシルンクルとの戦い」にも、彼らは登場している。したがって、「ボンモシルンクルとの戦い」は、「フレマウポとの戦い」と基本的に同じエピソードであり、さらう人物・さらわれる人物をそれぞれ置き換えた形で挿入されたものであると考える。伝承者の時代の新旧からも十分に予想されることではあるが、本来の形はテキストBであって、そこにエピソードがひとつ挿入された新しい形がテキストAであろう。

このテキストAで挿入されたと考えられる「ボンモシルンクルとの戦い」では、戦う理由・因縁も、女を誘拐した理由もまったく語られていない。なお、「フレマウポとの戦い」における誘拐では、「素晴らしいと噂に高い女を自分の弟の嫁にしたいと思ったから」と理由を述べていることから、元来このエピソードに理由が欠落していたわけではない。

そこで、その理由が語られないのは、もともとの「フレマウポとの戦い」と「ボンモシルンクルとの戦い」との最も大きな違いから、この場面が後に挿入されたエピソードであることに起因するのではないだろうか。挿入されたエピソードは、前後の物語とは無関係であり、本来の物語の流れから乖離している。そのため、戦いの理由を過去に求めることはなく、来歴話の形

で戦いの理由が語られることはないであろう。しかし、挿入エピソードにおいても、まったく唐突に誰かと戦いはじめるわけではない。ここでは、過去とのつながりがない代わりに、「現在」起こっている事柄が、戦いの契機となる。敵から襲撃されたり、ここで取り上げた「ボンモシルンクルとの戦い」のように敵が主人公の味方の女をさらったりといった、主人公の眼前で、主に不可避な敵襲による「現在進行中」の出来事が語られ、そのまま戦いに突入していく。つまり、「現在」の出来事が戦いのきっかけであり、理由となるのである。

ところで、これまでに見た「ボンモシルンクルとの戦い」の直前で語られている「カネベトウンクルらとの戦い」でも同様に、敵が主人公たちを襲撃してくる理由が一切語られず、来歴話を欠いている。このエピソードについて中川（二二〇）では、「この部分は、一番目の話とは全然繋がっていません」とした上で、登場人物についても「イヨチ人とかサンプト人、ルベツム人、ルエサ二人、イレスユビなど」の主人公の味方たちが「突然現れて」いるが、彼らは前後のエピソードでは登場しないため、このエピソードは挿入された段だと考えられると述べている（三四八頁）。こうした事柄に加えて、ここで挙げたように戦いの理由が語られないことから、やはりこのエピソードは挿入されたものだと思なせるのではないだろうか。

なお、ここで取り上げた英雄叙事詩「クトゥネシリカ」は、物語全体の長さは鍋沢元蔵氏による他の英雄叙事詩より三倍以

上も長い。にも関わらず、来歴話の回数だけを見ると、他の英雄叙事詩とさほど変わらない。これは、他の英雄叙事詩よりも戦闘場面が長くなっていることのほかに、以上に見たように来歴話が入らないエピソードの存在も関係していると考えられる。

(4) 反復的来歴話の内容と挿入される場面

反復的来歴話で語られる内容を見ていくと、三種類に大別できる。「戦いの理由」、「戦いのまとめ」、「全体のまとめ」である。

このうち、「戦いの理由」は、補完的来歴話と共通する内容である。ただし、戦いの前ばかりでなく、戦いの後にも語られるのが、反復される際の特徴である。たとえば、戦いの後、主人公とその仲間たちは、彼らの山城などではしばしば酒宴を行うのだが、そこで語られることが多い。また、主人公に敵対する者たちも、しばしば戦い前に酒宴を開く。このように、戦いと戦いの合間など、登場人物たちがゆつくりと腰を落ち着けているところで、そこまでの状況を再確認するように、説明されるのである。また、反復においては、「イシカリ彦が／その原因となり／大勢で妬まれて」〔クトゥネシリカ〕四二六〇〜四二六二行〕のように、ごく短く、簡潔な形で語られることがあるのも特徴である。

次の「戦いのまとめ」は、当然のことながら戦いの後に語られる。アイヌ英雄叙事詩における戦いは、ひとつの戦いが終わるや否や、次の新しい敵との戦いに移行することも少なくない。その戦いと戦いの間には「倒れ木に腰掛けて休憩」、あるいは

「傷の手当て」をするのが常である。このような小休止も含めて、ひとつの戦いが終結すると、そこで主に直前の戦いの結果が簡潔に語られる。このように戦いが連続して行われる際には、戦いと戦いの間に「前の勇士との戦い（あるいは敵の村の殲滅）は終了した」ということを簡潔にまとめた後に、次の戦いに移行することが多い。たとえば、「余市姫」という物語では、主人公・余市姫の恋人である男が二度の戦いに負けてしまう。その後の場面では、主人公が彼に言うことばとして、「二度も／汝は全く殺されて／しまった」〔余市姫〕六三二〜六三三行〕というものがある。このように、二、三行程度の簡単な発言で、それまでの長い戦いを簡単にまとめるのである。

最後に、物語全体の流れをまとめて話す「全体のまとめ」が語られることもある。すべての戦いに勝利して、主人公が自分の山城に帰った後の大団円の場面で、主人公によって自分がこれまで行ってきた一部始終が長々と語られる。この「全体のまとめ」は、すべての英雄叙事詩で見られるわけではなく、むしろ少ないと言ってもいい。なぜなら、「全体のまとめ」が語られるのは、物語の初めで主人公と別行動を取るなどの理由から、物語の終盤でようやく合流する身内（育ての兄弟・肉親）がいる場合にのみ、彼らに事の顛末を教えるという体裁で語られるからである。このような最終局面での身内との合流は、それが見られない筋のほうが典型的であるため、多くの英雄叙事詩では、「全体のまとめ」は語られない。

反復的来歴話の挿入される場面については、以上に見たような基本的な傾向は見られるが、常に厳格にこれらの場面でのみ挿入されるのではない。各英雄叙事詩の特徴にあわせて、柔軟に対応しているのも見て取れる。

一例として、「クトゥネシリカ」では、戦いの最中での反復的来歴話が見られる。この場面で主人公に味方して戦っているのは、彼と恋仲になる虚病姫（ニサツタス）という嬢名の、もともとは敵の村の女である。彼女は自分の村を裏切って主人公の味方になるのだが、その際に急な病になったと言って（実は仮病だが）、自分の兄たちを騙して主人公への攻撃を遅らせたというエピソードを持っている。それが彼女の嬢名の由来でもある。彼女は、戦いの中にあつては主人公と共にみずから刀を「ぐるぐるまわし」ている。その最中に、「部下のない勇士（＝主人公）を／かばつて／（主人公に）太刀を向けるのは／好みません、／それがため／虚病を／起して／発覚したのです」（三八九五～三九〇一行）と、この時点よりも少し前に明らかになっている一連の事柄をくり返して語っている。そして、この発言の直後には再び主人公とともに敵との戦いに没頭するのである。

このように戦いの途中という、反復的来歴話が挿入されるにはイレギュラーな箇所である理由としては、この戦闘場面が長いことと関係があるのではないだろうか。この場面に限らず、「クトゥネシリカ」の戦いは総じて、他の英雄叙事詩よりも一戦一戦が長い。そのため、戦いの前に既に出てきている虚病姫（ニサツ

タス）のエピソードを明瞭に示すために、あえて戦いの途中であつても彼女に簡単に過去の出来事を語らせているのであろう。

(5) 反復的来歴話の回数

各英雄叙事詩における、反復的来歴話の回数を簡単に表にすると、次表二のようになる。

特に多く見られる話は「喰べ気違い」で、次に「犬育て、悪者育て」となっている。この両者には、主人公と敵対する人物が彼の身内を中心としているという共通点がある。

「喰べ気違い」では、主人公の噂の高さに嫉妬した実父と実弟・実妹が主人公に敵対する。「犬育て、悪者育て」では、主人公を土間で寝起きさせ、犬と同じような食べ物しか与えないような扱いをしてきた叔父夫婦、ならびに彼らの手助けをしたリクンチウ村の人々と戦っている。

表2 各テキストの「反復」の回数

| タイトル | 全行数 | 反復回数 |
|---------|------|------|
| ニタイバカイエ | 1760 | 1 |
| 鷲鎧 | 1374 | 2 |
| 食べ気違い | 1781 | 8 |
| 魔竜退治 | 980 | 2 |
| 余市姫 | 878 | 2 |
| トリカブト姫 | 1198 | 1 |
| 犬育て～ | 1361 | 5 |
| 水なしに育つ～ | 2822 | 3 |
| クトゥネシリカ | 6775 | 5 |

どちらの話でも、物語が終盤に至るまで反復的来歴話で語られるのは、相手がどんなにひどい心の持ち主か、あるいは主人公が身内からいかにひどい扱いを受けていたか、という内容が多い。それほどひどい人間なのだから、身内であっても殺されるのは仕方

がない、と主人公が身内を殺すことに対する正当化をするために何度でも念押しするように繰り返されているのではないかと考えられる。

一般にアイヌ英雄叙事詩の世界観は、倫理にのっとった勸善懲惡の世界ではない〔中川 一九九七 一五七―一五九頁〕。だが、少なくとも鍋沢元蔵氏の英雄叙事詩においては、主人公以外的人物も、自分の身内と敵対する際には、自分の弟は悪い心を持っているから殺されても構わない〔余市姫 八二二行―八四二行〕などのように語る場合が多い。したがって、敵対あるいは殺傷する相手が身内になる場合に限り、自分が非道なのではなく、相手が悪い奴だからという理由が必要になるといふ特徴があることを、反復的来歴話の回数や内容の偏りから言えるのではないだろうか。

6. むすび

ここまで、鍋沢元蔵氏筆録の英雄叙事詩における来歴話が語られる内容や場面の傾向などの特徴を、補完的来歴話と反復的来歴話に分けて述べてきた。そして、その物語において本来的ではなく後に挿入されたと考えられるエピソードに限っては来歴話が挿入されないと述べた。

逆に言えば、戦いの理由として来歴話を語ることなく、「現在の出来事が戦いのきっかけとなるエピソードは、挿入されたものである可能性が高いということになる。こうした観点は、今

後のアイヌ英雄叙事詩研究において、各叙事詩の成立やエピソード間の関係性などを考察する一助となるのではないだろうか。

注

(1) 鍋沢元蔵氏による英雄叙事詩の筆録テキストとしては、浦田(一九九八)にも二編が収録されている。だが、二編とも門別町郷土史研究会(一九六九)収録の英雄叙事詩のバリエーションとなっており、内容的にも表現的にも両者のテキストは非常に似ている。そのため、本論文では浦田(一九九八)所収のテキストは、基本的には取り上げず、参考程度にとどめた。

(2) 鍋沢氏によるアイヌ語の記述法では、「クト・ネシリカ」になるが、本論文では「クトゥネシリカ」と表記した。以下も同様である。

(3) ヤイコトウイマ／コシラムスイエ「考える、思いをめぐらせる」は、必ずしも表現が固定しているわけではない。他に、同じ動詞の複数形であるヤイコトウイマ／コシラムスイバという形や、「〜について考える」という他動詞形のエヤイコトウイマ／コシラムスイエ(〜スイバ)という形も見られる。各文脈における前後のつながりなどによって、以上のようなバリエーションは見られるが、本論で見られる語の機能を考えるにあたっては、いずれの表現においても同じものとして取り扱う。なお、原著ではいずれも、アイヌ語はローマ字で表記されているが、本論文では引用す

るにあたって、筆者がカタカナ表記に直した。以下もすべて同様である。

(4) テキストの引用にあたっては、原著の訳をそのまま使用し、適宜()内に筆者が補足を加えた。以下、すべて同様である。

(5) 戦いの名称は筆者による。

(6) ただし、テキストAのほうがテキストBより新しい形であることは、鍋沢元蔵氏によって「ボンモシルンク」との戦い「が挿入されたという意味ではない。『久保寺逸彦ノート』所収の平賀ヤヤシ氏による「クトウネシカ(クツネシカ)」にも、この戦いは見られる。

(7) なお、タイトルだけ見ると「水なしに育つ、火なしに育つ」もひどい生い立ちの話のように見える。実際にひどい境遇の少年の話が冒頭で語られるのだが、彼が「水なしに」育てられたことは、それきりまったく触れられることもなく、その後の物語の展開にもまったく関わってこない。したがって、この物語における主要な敵対者は主人公の身内ではないため、本文中で詳述した二話とは、その点で大きく異なっている。

使用テキスト

金田一京助『アイヌ叙事詩 ユーカラの研究』一九三二 東洋文庫
門別町郷土史研究会(編)『アイヌ叙事詩 クトネシリカ』『鍋沢元蔵(筆録)、扇谷昌康(訳注)』一九六五 門別町郷土史研究会

門別町郷土史研究会(編)『アイヌの叙事詩』『鍋沢元蔵(筆録)、扇谷昌康(訳注)』一九六九 門別町郷土史研究会

引用・参考文献

浦田遊(編)『アイヌ・モシリ——幻のアイヌ語誌復刊』

一九九八 釧路アイヌ文化懇話会

ジェラルド・ジュネット(著)、花輪光・和泉涼一(訳)『物語のディ

スクール』一九八五 星雲社

中川裕『アイヌの物語世界』一九九七 平凡社ライブラリー

中川裕『英雄叙事詩に見られる時間層』本田優子(編)『札幌大

学附属総合研究所 研究叢書1 伝承から探るアイヌの歴史』

二〇一〇 札幌大学附属研究所

ジェラルド・プリンス(著)、遠藤健一(訳)『物語論辞典』

一九九一 松柏社

北海道教育庁社会教育部／生涯学習部文化課(編)『アイヌ民俗

文化財口承文芸シリーズ 久保寺逸彦ノート(全五冊)』北海道

道教育委員会／北海道文化財保護協会 一九八六―一九九〇

(付記)

本論文は第三四回日本口承文芸学会大会(二〇一〇年六月六日、於・立正大学)で行った研究発表「アイヌ英雄叙事詩における経緯に関する発話」を改題し、増補・改稿したものである。(えんどう・しほ／千葉大学大学院)